

＝後半《意見交換》＝

3人のパネリストの皆さんの言葉、どのような思いで受け止めていただいたでしょうか。会場の都合で、本当に限られた時間になるんですが、できるだけ多くの方にマイクを握ってもらって、本集会のテーマ『ひとごと』から『わがこと』へ」に迫っていきたいと思います。これから、皆さんから発言をいただいたあと、最後に、伸二さんが中学1年の時に実施した1994年度の全同教徳島大会前日の全体学習の冒頭に、板野中学校の全校生徒で歌った谷村新司さんの「サライ」を歌って、この会を閉めたいと考えています。それでは発言を希望される方は、挙手してください。

《フロアー 1996年度板野中学校卒業生 島藤託也》

こんにちは。近隣の川内町で鳴門金時農家をしております。島藤といいます。本日は、人権地域フォーラムを開催していただき、この会場に参加させていただき、とてもありがたく嬉しく思いました。ありがとうございます。

先ほど、伸二君に話を頂いたんですけど、この会場に参加させていただいて、皆さんのお話を聞かせていただいて思ったこと。私は、板野町出身で、板野中学校卒業生なんです。私、今年42歳になるんですけど、こうやって1日1日を、人として、自分らしく生活させてもらったのが、当時中学校で受けた教育のおかげだなと、この席に座らせてもらって改めて思いました。

「本気の学習」の学びをしていただいたおかげで、(あふれる笑顔で楽しそうに)今日は、たまたま隣の席に、当時(中学3年の時)担任をしていただいた、ご迷惑をかけた先生もいらっしゃって、座らせてもらって胸がいっぱいになるんです。

改めて、私を救っていただいて本当にありがとうございましたって、本気で思いました。

それと同時に、教育の可能性、教育の大切さ、次の代に、私は一農家なんですけど、農家のおじさんとしてこれから生きていく子どもたちに何ができるのか、いろんなことを考えさせてもらいました。

(生き生きと)部落差別の問題、あらゆる差別、人がドロドロしてしまっている、持ってしまっているいろんなもので起こってしまう事件とか、いろんなことがあると思うんですけど、私は、人として生まれて、人としての生きる喜び、幸せ感じて、一生懸命自身を高めていきたい。それだけなんです。

(力を込めて)個々、大人も子どもも自分のステージで、自分のできることを、いかに自分を自己分析して、自分の出せる精いっぱいので、一生懸命そのステージを生活していくか、目標に向かってチャレンジしていける環境が、いろんな地域、いろんな場所で浸透していったら、この社会が絶対よくなると思っています。少なくとも、今よりは豊かな社会が訪れるんじゃないかなって、思っています。

話がまとまっていないんですけど、「今」「ここ」でありがたい形で、出会わせてもらって、自分なりに人権教育とかいろんなことを考える。自分にもかかわることですし、差別を許してしまったり、いろいろな、あらゆる問題を許してしまっている世の中。差別があることでしんどい思いをするのは私自身だと思っていたけど、そうじゃなくて、みんながいろいろな経験を受けていることも理解していますし、しんどい思いをしているのは、差別があることでみんなが制限を受けていると思っているんです。

理解しているんですけど、今日もお話を伸二君からいただいたんですけど、わが娘のこと、自分は、どんなことをしても家族のことを大事にしていきたい。自分自身が人生で喜びも感じているように、僕は、娘たちに自分の生きざまを見てほしいと思っています。このことは、あくまでも僕の考えなんですけど、娘たちの幸せをすごく祈っています。だからこそ、(言葉を探しながら)この教育で出会った仲間の存在をありがたいなと

思いました。

(檀上の中野さんに「またゆっくり話そうな」と笑顔で伝える姿に、会場が温かな笑いに包まれる)

僕は、人として生きるよろこびを改めて学ばせてもらったと思っています。まだ言いたいことがいっぱいあるんですけど、(体中で楽しくて仕方がないという表現をしながら)なんかぶっ飛んでしまいました。

それでも、(8月6日の)中学生集会、午前の参加だけで、午後から行けなくて半日しか居れなかったんですけど、本当に子どもたちがいきいきと自己表現する姿を見させてもらって、本当に素晴らしいことをしよるなど、元気をもらったし、今年の中学生集会のポスターは、私の仕事をしよる作業場に1枚と、台所に1枚。伸ちゃんにこの間届けてもらって、貼らせてもらっています。

娘は言わなくても知っていると思います。だからこそ、背中を思いっきり見せたい。1日1日を大切にしていきたいと思いました。

(はじけそうな笑顔で)あと1つ。星野源さんが、今世界陸上をしているんですが、テーマソングを歌っていて、ラジオの深夜放送を1時半から3時まで聞いて。日の出前の4時からラジオを聞きながら農作業をするのがごっつい好きで、星野源さんが世界陸上のテーマソングを歌っていて、「生命体」って言うんですけど、星野源さんは、僕にとってスターなんです。

スターの星野源さんが、森口先生や吉成先生、伸ちゃんのように「人権について考えよう」とか、語っていて嬉しかったので、時間を取ってしまったんですけど、紹介をさせてもらいました。終わります。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

(笑顔で)ありがとうございます。

《フロアー 人権塾あゆみ会代表 薦田耕作》

香川県の三豊市で、NPO法人「ピース」の中で、「人権塾あゆみ会」というのをやっている、薦田と言います。去年の徳島の中学生集会の話が出て、伸二さんの話が出ました。その場に、私たち「あゆみ会」の方から5~6人参加していたんです。うちの組織の「ピース」の中の、一緒に行った2人は、部落解放同盟の組合員で解放運動もしていて、1人が支部長で、1人が書記長です。

去年の伸二さんが話をした時の中学生集会に、娘さんも一緒に来て語られる話を聞いていました。私たちも月に1回、「あゆみ会」という会合を開いて、全部で30人、実際は20人弱、毎月集まるんですけど、中学生集会の話をしました。

その中で、書記長の方が伸二さんより年がちょっと上です。伸二さんの語りを聞いて、「本音を言っていないかな」と、こういうことを言って、「俺は腹が立った」と言いました。

私が言ったのではないですよ。その人が言うには、「何で、今後がどうなるかわからんことを、他人任せでやっていることに腹が立った。俺は絶対そういうやり方はしない。きちんと自分の力で、(子どもは今年小学校1年です)自分の言葉で伝える」ということを力説しておりました。

それを聞いていた支部長は、「俺だったら連れて来る」と言いました。その人の子どもは中学3年でした。今年は、高校1年になるんですが、残念ながら、中学生の間は、立場のことについては言い切らなかったんです。

でも、伸二さんの中学生集会での様子を見て、俺だったら連れて行くと言いました。

今、言われている「鳥取ループ」が私たちのムラに来て、ユーチューブで(私たちのムラを)さらしました。その動画で教えてないのに(自分の住んでいるところが部落であることを)知るんです。

その時にいろんな意見が出たんですけど、別の場所のお母さんですけど、この人も子どもが居ります。

その人が言うんです。「伸二さんは、中学生集会のあの場が、自分がずっと大切にしてきた場で、その場の仲間のことを圧倒的に信じてきたから、安心してその場に自分の子どもを連れて来られたのではないか。書記長さんは、残念だけど、そういう場がなかった。それだけのことと違うんですか？」というような反論を返します。

特に、その中でどちらが良いとか悪いとか、そんな答えは出しません。

それぞれの思いというのは、なかなか人の考えで変わるものではありません。

それ以後も、月1回の「あゆみ会」というのは続けているんですが、関連した話で、この人もいわゆる「未指定地区」の人ですけど、「性的少数者の問題は、自分個人で解決できる。ところが、部落差別の問題は、個人で解決しない。カミングアウトしたら、周りの人に影響が出る。だから、カミングアウトはそんなに簡単にすべきではない」という言い方です。

それで、ちょっと前の時期に、私たちも、今日と同じように、「大人の語る会」というのを三豊市の方でやっているんですけど、実は、今年パネラーとしてある人をお願いしていたんです。

その人は、部落差別解消に非常に強い思いを持った人で、「是非、私は壇上に立ってみんなに伝えたい」ということを、直前まで決意してくれていたんです。

ところが、自分が住んでいる地域の運動団体の支部長さんと話をしたら、その人は隣保館に勤めているんですが、「あんた個人の問題でない。あんたが今の肩書のまましゃべったら、家族が迷惑するよ」これは支部長の言葉ですよ。そういう話し合いがなされて、結局直前で(壇上で語ることを)断念したんです。

この場と同じように、(その集会も)パネリスト3人でやりたかったんですけど、2人でやりました。さっき、伸二さんがPTAの方のお話の中で、「部落、部落と言うから、かえって部落差別が広がるんだということが出てきたんだ」という話が出てきましたけど、これも違いますよね。

自分が自分のことを言おうと決心した人も、足を引っ張られる。

ほとんど全員の人が、子どもに部落ということを伝える時に、考えるんですね。

そのことが、私は部落差別だと思います。

吉成先生がテーマとして、『言えない』をつくっているのはだれ?という問いかけで、この答えを出して、今日の会を終わってほしいなと思うんですが、私は社会とか大人とか、全員とかいう、やや大きく包まれた言い方も、成立するんだろうと思いますけど、あえて突き詰めて言うならば、やっぱり、これは学校の教師。言えなくしているのは、学校の教師なのではないのかなと思います。

さっきの方が言われましたね。自分は、中学校の時に貴重なことを学ばせてもらった。だからこの場にもいるし、言いたいことも言える。それが希薄になっているのではないかなということ、あえて言わせてもらいました。

《コーディネーター 森口健司》

(一言一言に魂を込めて、じっくりと)この会場に集まった意味、それは「わがこと」を語るためです。この集会は、「わがこと」を語る会です。

皆さん、担任の先生が、自分のこと、自分の本当の思いをを言ってくれたら、子どもはうれしいです。子どもはそれに返します。でも、現実にはなかなかそうはいかない。自分の本心をさらけ出すことはなかなかない。結局、「ひとごと」「きれいごと」に終始するんです。

もう、答えは決まり切っているんです。「差別はなくしましょう」「差別はいけないと思います」それ以上

はないんです。それ以上言えなくなるんです。

差別はどこにあるか。先生の中にあるんです。自分は部落に生まれてない。自分は部落に生まれた。部落問題に関わるのが怖い。その壁というのどこにあるかということ語るんです。そのやり取りの中で子どもたちは返していくんです。だから、この学びが誇りになっていくんです。そういうこと、自分の本当の思いを語り合えたら、本気の教師は救われます。しかし、教師集団がそういう関係性にならなかつたら、1人の先生は浮くんです。

数年前の研究授業である先生が、生徒たちにこんな語りをしたことがあります。

「結婚しようとした彼女に言われました。『あなたの家が部落かどうかうちの両親が調べている』その時私はドキッとしました。」

私はその教師が、部落出身であることを知りませんでした。その研究授業で、彼のその語りを聞いたとき、身体が熱くなりました。

その教師の語りは続きます。

「僕は彼女に言いました。『君はどう思っているの?』と…。彼女は、『私は絶対あなたと結婚する』と言ってくれました。本当にうれしい言葉でした。」

教室の空気は明らかに変わりました。教師が解放されるから、生徒も解放されていきます。

そんなこと絶対言えないと思っている教師もいます。私もそんな教師でした。でも、この学びを積み上げていくことにより、私たちは変わっていきけるんです。

「兄ちゃんに重い障がいがある」

「弟が自閉症である」

そんなこと言いたくない人もいます。言わなくていいんです。

でも、語った瞬間、みんなが支えていく。一緒に考えていく。そういう社会になっていくんです。

語り合いの喜びはそこにあるんです。みんなが語る。友達が語る。そんな時間をやっぱりつくっていかなければ、そんな授業にしていかなければ、そんな研修会にしていかなければ、前進することはない。

その時間を過ごして終わり。1年間を過ごして終わり。そうではなくて、そこから自分はどうあるかを考える。この集会でマイクを握って語れる人は数名です。でも、アンケートに自分のことを本気で綴ったら、それが一つの啓発になり、自分のものになります。

行政職員として、教師として、一住民として、自分に何ができるかということを問うんです。

(笑顔で)時間があまりありませんで、短くお願いします。挙手してください。(フロアーに3人の手が挙がる。それを確認し、順番を決め、発言を促す)

《フロアー 土庄中学校教員 藤原一章》

小豆島から来ました。土庄中学校の藤原と言います。本当にパネリストの先生、もちろん森口先生、この場でお会いできて大変うれしいですし、この会場に来られた方も、本当にお久しぶりという方ばかりです。

夏になったらここへ来て、それから、家族と一緒にこの話を聞いたり語ったりということをやっていたんですけど、コロナがあったり、いろいろな厳しい状況があったりして、4年間、来られていませんでしたが、久々に来られて本当に嬉しかったです。

(前の席の中学生を示しながら)ここに、皆さんの語りをスポンジのように吸い込んでいる、次の世代を担ううちの3人の中学生もいますので、また次につながるんじゃないかなと思っています。

小豆島も、本当に板野中学校の全体学習とか、中学生集会、このフォーラムを参考にして、自分のことを

本気で語る会というのを、ちょっとずつ続けています。

コロナの間でも何とか細々と続けて、また復活をしてきています。この取り組みは、子どもたちの語りが、教師や大人をどんどん変えてくれているなど感じており、これからまた続けていこうと思います。

最後に伸二さん、お父さんが、悩んだり苦しんだりしながら前を向いて歩いているうちは、絶対子どもはついて来ると思いますし、僕もいろんな機会に、家族と一緒にこんな場に来たりとか、発表の場に家族がいてくれたりしながら、それをもとに家族と本気で語り合う瞬間ができています。僕も、伸二さんにまた刺激を頂いて、家に帰って語り合おうと思います。今日はありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございました。

《フロアー 元教員》

もう、25年くらい経つでしょうね。私も現役で同和教育の担当をしていた時代。一番はつきりするのは、徳島で同和教育の会が徳島で行われた際に、我々同和教育主事、並びに担当者が熱い徳島で会場設営をして、「これで会場準備できたな。さあ帰ろう」となった時に、(身体中でその状況を表現しながら)「あれ？ちょっと待ってよ。おかしい。何かおかしいことがあるよ」ということで、前の横看板を見たら、「解放(かいほう)」の「解(かい)」が「開く」になっていたんです。

ああいうことがあったのを昨日のこのように思い出します。ちょっと、視点を変えさせていただきたいと思います。

『ひとごと』から『わがこと』へ」ということだったので、まず、コロナのことなんですけども、皆さん方、思い出しますね。最初の感染の頃、大変でしたね。あらゆる面で。

飲食業もそうですし、我々も命を助けてくださっている、健康を守ってくださっている医療関係の方々に対する偏見も、大変に出ましたね。

でも、3年間で、コロナに対しては、間違いなく我々は、これだけ学習できましたね。新型コロナウイルス感染症と言われながらも、これから10年先、20年先、研究データを取って本当の怖さを知ることがあるかもわかりませんが、でも、今生活する上については、壇上の方もマスクも外されているし、心配ないんだというのも変なんですけど、コロナに対する意識が変わったんです。この3年間、4年間で、学習していったと思います。我々の貴重な命がコロナで亡くなっていくのを目の当たりにしながら。

もう1点が、先日、拉致問題の講演に、鳴門からJRに乗り、あわぎんホールまで行ってきました。その時に講演を会場で聞いたんですけど、めぐみさんの弟さんが講演されていたんです。

「今日は、自分の家族として、めぐみのことを考えてみてください。もし、自分にめぐみという娘があったら、どうしただろうなということを考えていただきたい」

この話を聞いて、私は考え方が180度変わりました。拉致問題、めぐみさんだけでなく、まだ解決されていない方もありますが、拉致問題では、その時まで「ひとごと」だったと思います。

その「ひとごと」にしたのは、我々の世代なんです。

そういうお題目で、政治家が利用して、選挙の時だけ「拉致問題解決しますよ」「頑張りますよ」そういう言葉をならべてから50年経つんです。

まず、自分の娘が誘拐されとったら、たった今でも相手の国へ行って、直接談判します。それは、事件です。誘拐事件です。先日、やっと自分のこととして考えることができたんです。まだ希望がある拉致問題だ

ったら変わると思うんですけど、もし、娘がめぐみさんであれば、命を懸けて相手の国へ渡って行って、返せと言います。それができない社会の方がおかしいんじゃないですか？

最後に、お題をこだわるのではなくて、行動に示しましょうね。そういう1年にしましょうねということをおっしゃっていただけます。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございました。

《フロアー 「人権こども塾」塾生》

僕は、この人権地域フォーラムに参加したのは2回目です。「人権を語り合う中学生交流集会」に参加するようになって、その取り組みを継続するために「人権こども塾」にも参加しています。

人権こども塾では、部落問題を始めとする人権問題について学んでいるんですが、8月19日(土)に在日コリアンのことを取り上げたテレビ番組を見ました。大阪にある朝鮮学校が閉校になっていくことを伝えていた番組ですが、そこで僕も信じられない光景があつて。

それが、北朝鮮がミサイルとかつクツいて、実験とか言って打ち上げているじゃないですか。その朝鮮学校というのが、住宅地の中に建っているんですけど、そこに通っている子たちはひどいことを言われて、その朝鮮学校で学ぶ子どもたちには何の責任もないことなのに、どうしてそんなことが起こるのかと思いました。人権こども塾でも、ヘイトスピーチのことを学習しています。

今日、この人権フォーラムに参加したことにもつながるんですけど、様々な人権問題を学ぶことを通して、人間として成長していきたいと思っています。

《コーディネーター 森口健司》

人権こども塾で学んでいくことが、人間性を豊かにしています。人権学習は、すべての子どもたちにとって大きなよろこびです。

あと1人か2人、お願いします。

《フロアー 屋島中学校教員 栗原まこと》

久しぶりに参加させていただいて、ありがとうございました。伸二さんの語りに感動しました。娘さんたちに言いたいことは、あなたたちのお父さんは格好いい。伸二さんに拍手を。(会場に大きな拍手)

一つ、森口先生に久しぶりに会ったんですけど、やせていますね。(会場に明るい笑い)心配です。終わります。(笑の中に拍手)

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございます。コロナ禍で、深酒をしなくなりました。健康です。それでは最後をお願いします。

《フロアー 元板野中学校教員 山口智恵子》

今、香川県の方が言われた通りで、伸二君を中学生時代からずっと見ているんですけど、いつも格好いいです。お父さんになっても本当に素晴らしくて、涙が出るばかりです。

(涙があふれるのをこらえながら)ずっと応援していきたいと思ひますし、いつも伸二君に恥ずかしくない

自分でいたいなと思います。私も頑張ります。(拍手)

《コーディネーター 森口健司》

本当に、自分に何が問われているかということです。自分です。アンケート用紙にいっぱいメッセージを書いてください。伸二さんに、佐伯さんに、そして吉成さんに。

自分と向き合うことです。その中で人生が変わっていきます。(いっぱい笑顔で)時間がないんですけど、3人に一言ずつ語っていただきます。

《パネリスト 吉成正士》

(笑顔で)私のことはいいので、伸二君の娘さんに言いたいです。

昔こんな忘れもしない授業がありました。

それは、ある中学校と、板野中学校の交流全体学習での語り合いです。板野中学校の生徒たちが語り合う全体学習について、共に語り合ったある中学校の生徒が語った言葉です。

「この問題は、大人の残してきた問題なんだから、大人が考えなんだからいかん。中学生の僕らは受験勉強で忙しいんだから、そんなことを考えている暇はないんだ。」

この言葉を聞いていて、ズキンとききました。その通りだなと思います。

でも、中学生に教えられました。その発言に対して、当時の板野中学校の生徒は、何を返していったかという、その発言に寄り添いながら、その発言を否定することなく、「だけど、僕たちはこの学習が好きだからしている」と言ったんです。

こうして、みんなで語り合う学習が好きだからやっていると言ったんです。

その語りを聴いた時、相手の学校の発言した子は、再度挙手をして、「わかりました。ごめんなさい」と言ったんです。

そのいさぎよさというか、今、意地を張るとかあるじゃないですか。

そうじゃなくて、「わかりました。ごめんなさい」と素直に言えるような関係性みたいなものを、今一度大人は子どもらを見習ってというか、もう一回、思い返して考えて大事にしていかなければいけないというのを改めて思いました。

《コーディネーター 森口健司》

中学生集会が28年間続いたのも、そんな中学生のいさぎよい語り合いの中で、積み上げられてきたからだと思います。では、伸二さん。

《パネリスト 中野伸二》

さっき、託也君が話してくれた通り、生き生きと、自分の人生楽しくという部分があると思うんですけど、僕もそう思います。でも、どうやってという部分は絶対考えなくてはいけないと思うし、親としてどうしたらいいというのは、できる人たちが発信していかなければならないと、僕は思っているし、僕は、勉強させてもらってきた以上、誰かに伝えていかなければいけないという役目があると思っています。

僕がこういうところに呼ばれて話をするのは、やっぱり、今まで育ててくれた人たち、先生が、僕たちの時代は本気でした。生徒の前で涙しながら話してくれて、安心して僕らが言える場所というのはありました。だから、今、僕にできることがあれば何でもやりますということです。

先生たちが心配しているであろう「差別解消」人権問題を解決するというのを、僕たちは請け負って、これから次の世代に受け負わせていかなければいけないという役目があると思うので、託也君、広瀬、42歳の同級生は多分、子どもに伝えていくんだったら一番大事な年代だと思うので、これからも頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

《コーディネーター 森口健司》

そいれでは、最後になります。佐伯さん、お願いします。

《パネリスト 佐伯孝代》

では、一言だけ。まず私は、人が人間関係の中で一番きついのは、他人にとやかく言われることではなく、その繰り返しの中で、自分で自分を過小評価してしまい、自分が自分を認められなくなったり、何かをする時、周りの顔色を伺い、自信を持った行動ができなくなり、それまでできていたことすら不安を感じてしまうこと。プレッシャーや、ストレスや、自信喪失を乗り越える時の一番手ごわい相手は、誰でもない、自分自身だと思っています。

そして、一番大きな力になるのは、たった一人でもいい、どんな時でも心の底から「私」を信じてくれる、そういう存在だと思っています。そういう仲間をつくり続けながら、自分が学んだことを誰かに届けていくという、頭の中に収めておくのではなくて、人とつながりたいと行動するのは大事なことだと思っています。

私の仲間の若者たちの居場所づくりをこれからも続けていきたいなと思います。ありがとうございました。

《コーディネーター 森口健司》

ありがとうございました。それでは、メッセージの映像を観ていただいて「サライ」の歌を歌って終わりたいと思います。

＝メッセージと「サライ」の歌に乗せて、第44回全国同和教育研究会徳島大会前日に公開した板野中学校の全体学習の様子、様々な人権学習や交流会の画像が「サライ」の楽曲で紹介される＝

(画面の、「サライ」の歌詞の字幕を見つめながら、会場に歌声が広がっていく。画面上でも、初め硬かった表情の若者たちの徐々に笑顔になり繋がろうとする変化も映し出されていく)

《コーディネーター 森口健司》

皆さんの眼差しに、本当に力をもらいました。やはり、切ない現実はあります。だからこそ、つながり続けていく。人権学習のよろこびは、「共感」です。「連帯」です。「信頼と尊敬」です。そして、あらゆる「感謝」です。そういう関係を積み上げていきたいと思っています。

4年ぶりに皆さんを迎えて、本当に、この時間を共有できたことにいっぱい力をもらって、歩き続けていきたいと思っています。語るというよろこびも、また皆さんとつくってきたいと思っています。

パネリストの皆さん、本当にありがとうございました。(壇上の全員が立ち上がり、一礼する)

このフォーラムの記録は、T-over人権教育研究所のホームページで後日公開します。是非皆さん、この記録を読み返し、この日を振り返っていただければ幸いです。本日は皆さん、ありがとうございました。

《司会者》

森口さん、パネリストの皆さん、ありがとうございました。閉会にあたりまして、鳴門市人権教育推進協議会会長 島田茂仁よりご挨拶申し上げます。

《鳴門市人権教育推進協議会会長 島田茂仁》

今日は、この感動的な時間と共に持てたこと、大変うれしく、またありがたく思います。

県外からも暑い中、たくさんの方に来ていただき、ありがとうございました。壇上の森口先生始め、3名のパネリストの方々の熱い思い。ここにおられる方々は、しっかりと受け止めて頂けたことと思います。

皆さんで日常の活動に生かしていただきたいなと思います。この会の開催にあたりまして、関係者の方々ありがとうございました。

パネリストの方々、大変ありがとうございました。またよろしくお願いします。(大きな拍手)

《司会者》

以上で、2023年度鳴門市人権地域フォーラムを終了いたします。皆様、どうもありがとうございました。